

Taitetsu UNNO(ed.) 'THE RELIGIOUS PHILOSOPHY OF NISHITANI KEIJI'

(序一四頁、本文三三六頁、索引一四頁。Asian Humanity Press, 1989)

仲原 孝

西谷啓治の主著『宗教とは何か』が Jan Van Bragt によつて 'Religion and Nothingness' という表題で英訳され刊行されたのは一九八二年のことであつた (University of California Press)。それからほぼ二年後の一九八四年四月、Taitetsu Unno と Robert Thurman とが発起人となつて、この書をめぐるシンポジウムが、スミス、アーモスト両カレッジにおいて開催された。その時に行なわれた諸発表と後で寄稿された諸論文とを Unno が一冊の本にまとめ公刊したのが、ここで紹介する『西谷啓治の宗教哲学』と題された書である。編者 Unno も本書の序文で述べている通り、本書の刊行以前には西谷の思想に対する西洋の側からの包括的な研究は、主なものとしては Hans Waldenfels の『絶対無』が挙げられる程度で、殊にアメリカの思想界は本書において文字通り初めて西谷の思想に対する本格的な対決を開始するに至つたのである。その意味で本書は極めて注目すべき業績であると言つてよいであらう。

本編は全五部より成る。第一部「神」、第二部「科学」、第三

部「倫理」、第四部「歴史」、第五部「仏教」という構成で、これら様々な角度から西谷の宗教哲学に綿密な検討を加えようというものである。以下、本書の内容を簡単に紹介してみたい。

本書は先ず最初に、本編に先立ってその言わば導入という形で、上述のシンポジウムの冒頭で発表された三篇の文章を配置している。即ち、西谷啓治「空との出会い」、Jan Van Bragt『『宗教とは何か』を 'Religion and Nothingness' に翻訳して』、阿部正雄「西洋の哲学及び神学への西谷の挑戦」の三篇である。このシンポジウムには最初、西谷自身が参加することが予定されていたが、それが急遽不可能になつた為に、代りに短い文章を寄せることになつた。それが「空との出会い」と題された一編である。ここでは西谷は、彼の根本的な課題が「西洋哲学から学んだものを手掛りにして東洋的な思想を改めて思惟し直すこと」に存していると語り、そして東洋的な思想が問題にしようとする根本的な事柄を具体的に示す為に、西谷自身の根本経験の一つを美しい言葉で描写している。西谷の思想の意味を

理解する或る鍵を端的に提示して見せている、短いけれども味わい深い一文であると言えよう。

Bragt の文章は、シンポジウムの出席者に対して西谷の人となりやその思索の現場の雰囲気伝えることを目指したもので、『宗教とは何か』を翻訳する上での訳語の決定などの相談の為に Bragt が西谷の自宅を訪れた際の模様を始め、具体的な逸話が数多く紹介されていて、西谷の人柄を知る上で大変に興味深い。続く阿部の論文は、本編ではなくその導入の位置に置かれていることから知られる様に、研究論文と言うよりは寧ろ西谷の思想への入門という意図を以て書かれたものである。

『宗教とは何か』という書は、実際に読んでみると、厳密に論理的・体系的にまとめられていると言うよりは寧ろかなり自由な形で思想が展開されており、その為に多くの箇所ですみずしみに直ちに議論の構造が見通し易くないものとなっているが、阿部はこの論文で『宗教とは何か』の前半四章の内容を極めて的確に整理し、特に西洋の哲学や神学に親しい読者に対して西谷の書が如何なる問題を提起しているかという観点から、西谷の思想の意味を明解に解き明かしている。

次に本編であるが、先ず「神」と題された第一部に集められた三編の論文は、編者によると、上述のシンポジウムで直接に扱われたものではなく、空と神との関係をめぐる問題に某かの解明を与えるべく、後から依頼されて書かれたものである。

Langdon Gilkey 「西谷啓治の「Religion and Nothingness」」
Thomas J.J. Altizer 「空と神」 Gordon D.Kaufman 「神と空

——実験的試論」の三編がそれである。表題を一見して直ちに伺われる様に、ここでは三人の神学者が、キリスト教の「神」の立場から西谷の『宗教とは何か』を貫く「空」の立場を如何に理解すべきであるかを検討している。

Gilkey は、『宗教とは何か』の内容をコンパクトに要約しながら、そこに西洋哲学には決して見ることのできない独自の思想が生きていることを指摘する。縁起思想に代表される仏教の世界観に関する限り、それに類似する思想を西洋の、例えばヘーゲルやホワイトヘッドやネオ・ナチュラリズムの内に見出すことは容易であるが、仏教は（そして西谷もまた）この様に見られた世界を究極のものとして、それを脱却し、絶対の空の立場に立とうとする。そこが西洋思想との根本的な相違であり、西洋が西谷から学ぶべき点であると言う。

それに対し、その独特の「神の死の神学」の立場から Altizer は、神を絶対の無として、或いは自己を空とする神として (Altizer の所謂 the Crucified God として) 理解するのは、寧ろキリスト教が元来有していた立場であることを強調する。しかし、キリスト教はその歴史的展開の過程の中で、根源的な絶対無を忘却し、神をヘーゲルの所謂「悪無限」として表象することを伝統として来た。その結末がニーチェにおいて自覚にもたらされたキリスト教の神の死である。西洋思想の内では、絶対無は最早絶対的ニヒリズムという形しか取り得なくなってしまうのである。こうした状況の中でお神を絶対無として思惟する唯一の可能性は、西洋思想が東洋思想に対して、とり

わけ仏教に對して、自らを開くことしかあり得ない、と著者は言う。こうして Alizer は西谷を、「キリスト教の再生」に不可欠な、「キリスト教教義学が忘れてしまったものをなお理解している仏教思想家」として受け取ろうとするのである。

Kaufman の論文は、直接に西谷の思想を扱うのではなく、キリスト教そのものを捉え直すことよってキリスト教の内部から西谷の思想の圏域へと近づくことを試みている。現在キリスト教が大きな限界に直面しているのは、キリスト教が神を实体化し人格化して捉えることに由来する。これは結局、神を一切の中心に置くという考え方が最早限界に直面しているということの意味している。それに対して Kaufman は、神ではなくイエス・キリストという一人格を、しかも弱き者・苦しむ者・死すべき者としてのイエス・キリストを、改めてキリスト教の中心に置くことが必要であると考える。そうすることによってキリスト教は、ユダヤ教やイスラム教の様な単なる神中心の宗教とは異なり、寧ろ空や慈悲の立場に立つ仏教に極めて近い性格を持つに至る、と言ふ。

次に第二部には、Corra-Jean Eaton Robinson 「動的空の内の科学と宗教との抗争」、Sten H. Stenson 「科学とテラノロジーとを越えて絶対空へ」、Robert A. F. Thurman 「仏教の Inner Science と西谷」という三篇の論文が収録されている。因みに、第二部の総題の 'Science' は Robinson と Stenson の論文では「科学」という意味で理解されているが、Thurman は所謂宗教の直観的な立場に對立する意味での「知」乃至は

「学」の立場を表わす概念として用いている。

Robinson の論文は、「空」の立場が如何なる意味で科学と宗教との對立を超越し得るかという点に着目して西谷の思想を整理し、まとめたものである。空の立場から見れば、科学も宗教も最終的には同じ本質を持つ営みとして、即ち人格的即非人格的な真実在の realization を目指す運動として、理解され得るのであり、ただその実在が、科学では専ら非人格的な「自然法則」として理解されているのに対して、宗教では専ら人格的な「神」として理解される、という相違があるに過ぎないといふべきだが、簡潔にまとめられている。

Stenson は、科学技術が必然的にニヒリズムを帰結すること、そして絶対的なニヒリズムは絶対空の立場においてのみ克服され得ることを叙述している。しかし、この論文において興味深いのは寧ろ Eckhart, Kierkegaard, Freud, Heidegger, Tillich, Eliade 等の思想家から Robert Frost 等の現代詩や Mozart, Beethoven 等の音楽、更には著者自身の個人的な経験に至るまで、ありとあらゆる手掛りを総動員して、西谷の思想を西洋の文脈の中に自己化しようとする試みがなされていることである。著者は 'Religion and Nothingness' を禪の公案に譬えているが、この論文は著者なりの仕方での公案に答えようとした試みであると言つてよいかも知れない。但し、自己喪失の状態から真の自己の回復へ向つての運動をノイローゼ状態から健康状態の回復へ向つての運動との類比で理解しようとするなど、果して西谷の真意を捉えているかどうか検討の余地

があると思われる理解も少なくないが。

Thurman の論文の表題にある 'the Inner Science' という語は、*adhyaत्मavidya* (漢訳では「内明」) の英訳語として用いられており、仏教で最高の知慧とされる自己知を意味している。著者は、この意味での知慧を目指す仏教の哲学者達 (インダのチャンドラキールティ、チベットのツォンカパ等がここではとり上げられている) の認識論を、西谷が『宗教とは何か』の二・四章で提示している認識論と詳細に互って対比し、両者が顕著な類似性を有することを明らかにしている。こういった議論を背景にして著者は、西谷を現代の「文殊菩薩」として位置付け得ると主張する。一見西谷を神格化している様にも見えるが、ここは寧ろ仏教学者としての著者の、西谷に対する最高度の評価を意味すると解すべきであろう。

さて、「倫理」と題された第三部の最初の二篇の論文、即ち、David Little 「西谷の 'Religion and Nothingness' における倫理の問題」と Elisabeth Galin 「空・倫理・縁起」とは、夫々問題提起とそれに対する解答という関係になっている。先ず Little は、西洋哲学とりわけカントの実践哲学を手掛りとして、西谷の「空」の立場が果して倫理の問題に対する根本的な解答を与え得るかという疑問を提起する。カントの哲学から明確に読み取られる様に、人間の道徳的行為は、私と同様自律的でありしかもその自律性が私によって尊重されるべき「他者」というものの存在を前提として、初めて成立し得る。ところが西谷は、空の立場においては「絶対的に自己を殺す」とい

うことと同時に「自と他との差別と相対の場を突破する」ということが起こらねばならないと言う。とすれば、この様な空の立場においては、人間がこの世界の中で具体的に如何に行うべきであるかの規範は与えられないことになるのではなからうか。

仏教が総じて現実逃避的であり人間の主体性の放棄を称揚するものだという批判は Little に限らずしばしば行なわれている。しかしそれは誤解に基づいている、と Galin は言う。「無我」と言ってもそれは、自己も他者も全く消え去ってしまったことでは決してなく、ただ他と対立する意味での自己を一切の中心に置く態度が捨て去られることを意味するに過ぎない。空の場とは、自己が自己であることが同時に一切の他のものの為であるという相互依存的関係が初めて成立する場である。その意味で、空は従来の意味での倫理の根拠にはならずとも、全く新しい「相互依存性の倫理」(それは同時に「倫理ならざる倫理」であるが) を成り立たしめる場として充分に機能し得る、と Galin は主張する。しかし、空は客観的に存在するものではなく自己自身において自覚される以外にあり得ないものだとするならば、それではこの自覚を持たない者にとっては倫理は存在しないことになるのであろうか。この問題に対しては Galin は、田辺元の言う「懺悔道」や浄土教の「他力」信仰において、一文不知の凡夫が空の場においてある可能性が開かれていることを示唆し、ここに倫理を基礎付けようとしている。

第三部にはもう一編、Steven C. Rockefeller の「ジョン・デューイの自然主義的ヒューマニズムと西谷啓治」と題された論文が収められている。西谷は、西洋の思想から空の立場を理解する為の手掛りになるものとして、ニーチェ、ドストエフスキ、キェルケゴール、サルトルなどの思想を取り上げているが、著者はアメリカ人としての立場から、ここに更にもう一人、デューイの名前を付け加えることができるのではないかと、という問題提起を行なう。この論文は本書の内で分量的に最も長大な論文となっているが、実際ここでは、形而上学、自己の問題、倫理、宗教哲学といった様々な観点において、夫々章を分けて西谷の思想とデューイの思想とが詳細に比較検討され、両者の共通点と相違とが浮き彫りにされている。事物や人間を実体的に、即ち独立自存・永遠不変のものとして捉えることを拒否し、一切が無尽に連関し合いながら無限の生成の過程の内にある、という考え方を採る点で、両者は同じ思想を共有している、と著者は言う。しかし、デューイの思想に西谷の言う「虚無」の自覚を見出すことはできても、大疑・大死という出来事を経て初めて実現するとされる「空」の自覚は見出すことができない。その点でデューイの思想は西谷によって深化さるべき余地を残すが、他方で自己の問題が単に自己だけの問題に終始することなく同時に社会や歴史の問題とならねばならない限りににおいて、デューイの民主主義的ヒューマニズムの立場は西谷の思想をより一層豊かなものとする筈である。その意味で二人の思想は相補的な関係にあると考えるべきだ、と著者は結論している。

次に第四部であるが、本書の編者 Uno は、第四部の主題である「歴史」を「Religion and Nothingness」における最も難しい問題だと言っている。それは、西谷の立脚する仏教には元来西洋的な意味での「歴史」に対する思想が希薄であるからに他ならない。その意味で、第四部の第一論文の著者 Kasulis も指摘する様に、西谷の『宗教とは何か』の内でも「空と歴史」と題された一章は最も革新的な試みであると言ってよいであろう。この重大且つ困難な問題について、Thomas P. Kasulis 「『どこから』と『どこへ』と。西谷の歴史観に対する哲学的反省」、阿部正雄「意志・空・歴史」の二篇の論文が寄せられている。

Kasulis は先ず、西谷や西田を含めた東洋思想と西洋思想との根本的相違を、「どこから (Whence)」の立場と「どこへ (Whither)」の立場との相違として図式化する。即ち、東洋思想は物事をその由来からして理解しようとするのに対して、西洋思想は物事をその目的からして理解しようとする根本動向を有すると言っているのである。西洋における歴史への注目はここに由来すると考えられる。さて、空の立場において歴史を見ることによって、キリスト教の場合の様に歴史を超えたものによって意味付けられる歴史でもなく、またニーチェの場合の様に無意味さの中を永却回帰する歴史でもない、真の「自己目的」としての歴史を考える全く新しい立場が初めて可能となる。しかし他面、一切を空において、即ち一切を全き平等として見ることによって、存在全体の中で人間が占める特別な地位や、或い

は人間の歴史の中でキリストが占める一回的な地位というものを繪じて否定してしまつてよいであらうか、という問題を Kasulis は提起し、東洋思想に解消し尽くされない意義を西洋思想の内に見出し、と考へてゐる。

阿部はこの Kasulis の批判を更に根本的に展開する。阿部は先ず Kasulis の西洋思想と東洋思想との対比の仕方には問題があることを指摘する。確かに空を Whence として特徴付けることは可能であるが、それは Whither に対立する意味での Whence ではなく、一切の由来と将来とが共にそこから初めて可能となつてゐるもの、という意味での Whence でなければならぬ。その意味で空の立場には西洋思想と東洋思想とを包み込んでいる所があるのである。しかしそれを認めた上でなお、西谷の空の思想は歴史を考える上で決定的な視点を欠いてゐるのではないか、という問題を阿部は指摘する。西谷は、西洋的な歴史の立場も仏教の「業」の立場も共に意志の立場を根底に有するが故に不十分であるとして退ける。しかし、意志の立場を克服し、一切をそのあるがままの姿においてあらしめる立場に立つことは、即ち「当為(Sollen)」の成立する余地がなくなることを意味するであらう。従つてそこから歴史の目的論が十分に根拠付けられないことになる。ここに阿部は、全く新しい終末論、即ち、西洋の将来的な終末論ではなく、絶対の現在の立場での終末論の様なものをなお考へる余地が残されてゐる、と考へてゐる。

最後の第五部「仏教」には二本の論文が収録されてゐる。本

書自身の編者である Tateisu Urno の「大乘仏教における空と実在」は、西谷の思想の背景をなす仏教の伝統的な思想の水脈として、般若経や竜樹における空の思想、禪の思想と実践、華嚴仏教における事事無礙の法界縁起思想、浄土教の慈悲の思想という四つのもを挙げ、そのそれぞれに関して簡潔な解説を与えてゐる。西洋の研究者に対して西谷の仏教の背景について解りやすい解説を試みたものである。一方 Anne C. Klein の「慈悲と空」は、西谷の思想が仏教の伝統的な中観思想を現代の哲学の内に生かす新しい言葉を創造したという意味を持つとし、この様な立場から、「空」と共に中観思想の核を成す「慈悲」の概念を取り上げて、両者の本質的關係を、西谷の思想を援用しながら説明してゐる。

以上、全体を読んで来て、西谷の思想が今ゆっくりと、しかし着実に、西洋の思想に影響を与へつつあることが実感される。それは何も西谷の思想が忠実に受容されてゐるということではない。例えば第一部の Kaufman の論文、或いは第四部の Kasulis や阿部の論文に見られる様に、西谷に対する鋭い批判も含めて、西谷の問いかけに対する応答という形で思想が着実に動き始めてゐるということである。思想が真に偉大な思想であるならば、それは単に完結した教説として受容されて終わる様なものであるよりも、寧ろ絶えず新たな創造的な思想を生み出す原動力となるものである筈である。それは、プラトンやデカルト、カント等の例を挙げるまでもないであらう。西谷の思想が果たしてこの様な意味で創造的な原動力となることが

できるかどうか。それは現在の我々に対して向けられている問いに他ならない。本書はこの問に対する一つの解答の試みとして、注目に値すると言ふことができよう。
 (筆者なかはら・たかし大阪外国語大学〔哲学〕非常勤講師)

次 号 論 文 予 告

近世初頭における自然哲学と自然科学……………	藪 田 坦
エペクタンズ・ニューッサのグレゴリオスにおける「無限」の問題……………	土 井 健 司
マイスター・エックハルトにおける「自由」の問題……………	松 井 吉 康
論理的帰結関係をどう定義するか……………	橋 本 康 二

前 号 目 次

芸術と時間……………	吉 岡 健 二 郎
読書の精神物理学 ——有効視野の範囲をめぐって——	菅 阪 直 行
カントにおける「超越論的哲学」の意味……………	仲 原 孝
コミュニオンの意義と展開 ——ロバートソン・スミスからデュルケームへ——	管 康 弘